32　『鍼灸抜萃大成』の基礎理論について

斉藤　宗則
明治国際医療大学 基礎鍼灸学講座

【目的】近年，伝統医学の標準化が WHO や ISO 等で進められている．中国では伝統医学の近代化を図り，古典を基にその体系の基礎を教科書『中医基礎理論』として著し，改版を重ねている．一方，日本では独自の発展を遂げたが，それらを反映した研究資料や教科書がない．このため，日本の医学古典を調査し，「日本伝統医学基礎理論」構築の参考とする．

今回は『鍼灸抜萃大成』を取り上げた．本書は岡本一抱により著され，元禄 11 年（1698）の自序があり，翌年刊行されたもので，後に江戸期の三大鍼灸臨床書の一つに数えられるようになった．主な内容は鍼具，診察法，刺法，灸法，禁忌，穴法，諸病鍼灸要治の例と，臨床に必要な知識がまとめられている．本書における基礎理論について調査を行った．

【方法】底本は『臨床実践鍼灸流儀書集成』所収の元禄 12（1699）年本とした．哲学，陰陽五行，蔵象，気血津液，経絡，病因病機，予防治療原則等の基礎理論の内容が記載されている箇所を調べ，本書における基礎理論について検討した．

【結果】基礎理論の内容に含まれるものは，主に天人合一，太極，陰陽五行，蔵象，気血津液精，病因病機であった．そのうち，蔵象が七葉半と記載がもっとも多く，「霊蘭秘典論に云く肺は相傅の官，治節出と云云」などと，『素問』霊蘭秘典論篇，諺，古説等をもとにしていた．「太極の論」として，太極の説明を簡易に述べているが，「此理は言に述ても心に落つかず，心に会得しても，言に述かたし」と冒頭に言うとおり，作者の意図するところは明確でない．また，病因病機については，「諸病鍼灸要治の例」に関連する内容が含まれるのみで，項目立てはされていない．たとえば，「諸気　夫百病は気より生ず．喜で心を傷る者は其気散ず」等とあり，七情という病因と「喜で心を傷る」という病機が各所に散在している．経絡については「経絡ともに五臓六腑に属す」として図に示すのみにしており，経穴は「惟見やすからしめんと欲して」部位ごとに記載している．したがって，陰陽五行，臓腑や病因病機等の基本的内容は，簡潔であるが網羅されている．

【考察】本書は，自序や凡例によれば『鍼灸抜粋』を改め，初学者にわかりやすくしたものであり，「内経，難経，甲乙経，十四経等」を基に「大成」したものであるという．そのため，全般的に記載は端的であるが，基礎理論の核となる大まかな内容を含んでいるといえる．本書の基礎理論の特徴としては，1）主に『内経』等に基づいている，2）主な内容を網羅している，3）説明は端的である，4）陰陽五行の項目立てはしていないが，全書にその考えは浸透している，5）気血を重視している，が挙げられる．

蔵象に関しては，肺から胆まで経絡の順に，臓腑のはたらきをイメージする君主の官等から説明を始め，神明出ず等の霊蘭秘典論篇に記載されているはたらきのみを取り上げ，血脈を主る等は出していない．各臓の図では主に解剖を示している．基礎理論の記載内容の偏りの意図や鍼灸臨床とのつながりが，今後の課題である．

病因病機に関しては，たとえば「傷寒」では「寒は殺厲の気なり．秋の霧露．冬の霜雪みな寒邪なり．是以辛苦する人，起居常ならず．飲食時に順ならず」と寒邪の概念を説明し，感受する条件を起居や飲食として挙げている．このように，「要治の例」には病証と関連する外邪，七情，飲食，労倦，起居等の基本病因は備わっている．病機についても陰陽，気血，臓腑等が言及され，和せざる，傷る等端的なことが多いが，「吐血衄血」「倶に陽盛に陰虚火血を載て上経を錯し妄りに行て逆をなす」と比較的詳細に基礎理論を活用している部分も見られた．

【結論】『鍼灸抜萃大成』は主に『黄帝内経』『難経』に基づいた基礎理論を有しているが，内容は簡潔で限定的である．

なお，本研究は JSPS 科研費 24590642 の助成を受けたものである．